

研究論文 (Articles)

婚外恋愛継続時における男性の恋愛関係安定化意味付け作業¹⁾

——グラウンデッド・セオリー・アプローチによる理論生成——

松 本 健 輔

(立命館大学大学院先端総合学術研究科²⁾)

Defining Stabilization of Romantic Relationship for Men during Ongoing Extramarital Affairs : Theory Generation by Grounded Theory Approach

MATSUMOTO Kensuke

(Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences, Ritsumeikan University)

The purpose of this research is to examine how married men perceive extramarital affairs, and what these affairs mean socially. We interviewed ten married men who had been in extramarital affairs. Of these, we classified six men who claimed they were satisfied with their relationships with their wives as an informant set, and had the other four men in a comparison group. We analyzed the data given us using the Grounded Theory Approach. The results of Grounded Theory Approach revealed the following categories: 1. marital relations, 2. nutritional supplement, 3. reconsideration of marital relations, 4. emotional ties, 5. responsibility to the other party, 6. conflict and guilt toward the extramarital affair, 7. reevaluation of the relationship and 8. the task of self-definition. Based on the results, we analyzed these from the macro viewpoint of society. Our finding was that men who conducted extramarital affairs have different images from traditional adultery or gender issues.

Key Words : extramarital love relation, grounded theory approach, gender

キーワード : 婚外恋愛, グラウンデッド・セオリー・アプローチ, ジェンダー

1 背景と目的

日本人既婚男性における浮気経験者³⁾は実

に50.8%と半数以上におよぶという報告(野原, 1999)がある。一方, 司法統計年表(2008)によると, 女性からの家庭裁判所での離婚の申し立て理由として1番の理由は「性格の不一致」, 次いで2番目に「暴力の問題」, 3番目に「生活費の問題」, そして4番目に「異性関係」がくる。そのことから, かなりの確率で存在する婚外での恋愛は, 夫婦関係を壊し離婚に到る

1) 本論文は2007年度立命館大学大学院応用人間科学研究科修士論文の一部である。

2) 現カウンセリングルーム Humming Bird代表。

3) 本研究では「不倫」「浮気」という言葉はネガティブな意味を含むため引用以外は用いない。代わりによりニュートラルな言葉として「婚外恋愛」という言葉を用いる。

最たる要因ではないことは推測できる。もちろん、実際の理由との間に乖離がある可能性がある。また、協議離婚が中心の我が国の事情を考慮すると、この順位をそのまま鵜呑みにすることはできない。加えて、婚外での恋愛をどの程度の妻がしているかということが表されていないことも考慮の必要がある。しかし、少なくとも婚外で恋人を作らなくても、性格があわないという理由で離婚届を突きつけられる人たちがいるにもかかわらず、妻に知られているかどうかは別として、婚外で恋愛をしながらも妻に離婚届けを出されない人たちがかなりの数存在することが推測される。

研究の領域においても、婚外恋愛⁴⁾の研究は実態調査以外は皆無といってもいい(松本, 2008)。それに対して欧米では盛んであり、たとえば、GlassとWright (1992) がそれぞれの視点で婚外恋愛のタイプを別ける研究をおこなっている。また、婚外恋愛からの治療という点での研究も多くみられる(たとえば、Winek & Craven, 2003)。他方、婚外恋愛による不健康さをAllen (2005) が、逆にLinguist (1989) はより中立的、相対的に婚外恋愛の健康な点を指摘した。それら海外の婚外恋愛の研究から婚外恋愛という現象の断片的一面は理解できるものの、その婚外恋愛をしている当事者の心のプロセスに関してはまったくわかっていないと言える(松本, 2008)。

一方でメディアによって不倫という言葉は毎日のように飛び交い多くのイメージを世間に植え付けている。つまり、研究による客観的な記述がなく、バイアスのかかりやすいマスコミ報道のみが情報となるため、偏ったイメージを作り上げている可能性が高い。

今必要なことは、作られたイメージとしてではなく、客観的に婚外恋愛という現象がどのよ

うなものであるのかを明らかにすることである。そこから現代の日本の夫婦関係の一端が見えてくるのではないだろうか。

本研究では男性の婚外での恋愛の実態を明らかにすることの第一段階として、夫婦関係を維持しながら婚外恋愛をする男性の婚外恋愛関係がどのように保たれているかのプロセスという限定的な事象を明らかにすることを目的にした。なぜなら、妻との関係を大切に、そして円満に行いながらも真剣に恋人との関係を継続する男性は、従来とは違う夫婦のあり方を示してくれる、独特の夫婦観や夫婦像が見えてくると思われるからだ。

2 インフォーマントの選定と方法

2-1 インフォーマント

本研究では、知人の紹介を経由してインタビューーと面識のない婚外恋愛の経験がある既婚男性10名にインタビューを行った。

本研究の目的から、婚外恋愛の経験があり、その相手との関係が一時的なものではなく、さらに夫婦生活も円滑に行っているインフォーマント(以下info.)を選ぶ必要がある。そこで、本研究ではinfo.自身が①夫婦関係に不満がない②夫婦関係の良さ③妻への愛情④相手との真摯な関係について言及しているという4つの視点を設け、インタビューの中でそれらに関係した、自発的な発言が4つ全てに見られた方をinfo.の条件として選定した。以上のサンプリングの結果、本研究のinfo.は6名⁵⁾になった。また、様々な角度からの比較や、新たな概念を構築することを目的として上記の4条件に該当しない婚外

5) インフォーマントの属性以下の通りである。年齢：29～46歳。初婚。同時に二人以上の婚外での恋愛経験なし。妻との性生活1名以外あり。婚外恋愛の期間：1年～5年。相手の既婚の有無：5名既婚、1名独身。子どもの有無：1名子どもなし、4名子ども有り。婚外恋愛の恋愛の回数：1名以外複数。

4) 本研究では婚外恋愛を配偶者以外に特定の恋愛感情を向ける相手が継続的にいることと定義した。

恋愛の経験のあるinfo. 4名の語りも比較対象として扱った。そのデータを加え、新しい概念があがらないことを確認し理論的飽和化ある程度近づけたと判断しinfo.の新しい募集を中止した。なお、本研究は倫理的配慮として、info.の情報は研究を行う上での必要最低限とした。また、インタビュー時に、研究の趣旨を丁寧に説明し、話したくないことは話さなくていいこと、データは個人が特定されないよう配慮して扱うことを、インタビューデータは論文に記述することを伝え同意を得た。

なお、結果に年齢の違いなどinfo.の性質による違うプロセスが想定される。しかし、本研究において、それら性質を超えた理論の生成を目的にしているため、その差異は取り扱わない。

2-2 手続きと分析手法

調査はinfo.が希望する場所を優先し、半構造化面接を行った。面接時間は一時間を目安にと伝え、本人が特定されないよう配慮することを約束し、ICレコーダを用いる了承を得て録音した。なお、半構造化面接で使用した質問項目は「婚外恋愛に至った経緯とそのときの気持ち」「婚外恋愛を通して考えたこと」「夫婦関係の変化」「どう考えが変わっていったか」を自由に語ってもらった。面接中にまた、info.の発言をうけて、話の内容に対する質問を適宜行った。面接を終了し、分析に移行した後も、その過程で出た新しい疑問は可能な限りでメールや電話を通じて再度info.に質問した。

そこで得られたデータを逐語化しグラウンデッド・セオリー・アプローチに（以下GTA）により分析を行った。GTAは限定した範囲内で説明できる理論の生成ができ、そして質的研究の中でも体系的に分析手順が示されている。さらに本研究では、数あるGTAの中からインタビューデータの分析に適していて、婚外恋愛という限定された領域であるという点を考慮

し、領域密着型の理論生成を目的とする木下（2003）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに順じて分析を行った。以下に分析作業概要を示した。

1. インタビューデータを読み込み、文章の内容にそい研究テーマに基づいて概念を生成した。概念には定義を定めて、その定義を代表するラベルを付けた。（概念名は可能な限りinfo.の使用した言葉であるインディボコードを用いた）またその時、疑問や対極の概念と考えられるものなどを思いつく限り理論メモとして残した。
2. 1人目の事例の分析作業を終えた後、同じように2人目の事例の概念を挙げた。なお、その過程で1人目の事例で残した理論メモを参考に概念の定義やラベル名をより適切だと思われる形になるように変更を加えた。それが終了すると次のinfo.の語りを分析する。
3. 概念生成と平行し、概念の上位に位置するカテゴリ、コアカテゴリを作成し相互関係を検討した。
4. 比較群を比較対象として概念をより精緻化した。
5. カテゴリ、コアカテゴリともに逐語と比較し、適切であるか検討した。検討した結果必要に応じて変更を行った。
6. 理論メモを元に、ストーリーラインと概念、カテゴリ間の関係を図に表した。
7. 分析の中で不十分なデータに関しては、再度info.に質問を行う、また、対象者を増やし必要なデータ収集を行う等、の対処を行った。

3 結果と考察

本研究は婚外恋愛中の男性はどのように婚外恋愛関係を意味づけ維持させていくのかという

プロセスを明らかにすることを目的としたものである。よって、分析の上でのテーマを「婚外恋愛中の男性がどのように婚外恋愛関係を意味づけて維持していくのか」と設定し、分析を行った。その結果、以下に示した〔自己意味づけ作業〕をコアカテゴリーにまとまるカテゴリー間と概念間の関係が明らかになった。それを説明するために、まず全体の要約であるストーリーラインを示し、その後概念、概念間、カテゴリー、カテゴリー間の説明を示した。

本研究はGTAの性質上、結果と考察を別けて記述する事は不適切であると判断し、結果と考察を合わせて記述する。なぜなら、分析は段階的ではなくプロセスとして進行するため、そこには考察の要素が自動的に含まれること（木下, 2003）、また分析が的確に行われていればいるほど読み物のごとく読める内容となるのだが、そうした滑らかさは結果と考察に別けると得にくくなること（木下, 2003）があるからである。また、前述したようにGTAにおいてすべてのinfoの語りの中から理論生成を目的とするため個人の文脈は考慮しない。

3-1 ストーリーライン

本研究に関してのストーリーラインを以下に述べる。なお、〈 〉は概念、《 》はカテゴリー、[]はコアカテゴリー、『 』は定義を示した。

結婚という社会的に認められた婚姻制度に守られ、また、確立された妻との関係のなかで男性は安定と安らぎという人生の上で大切な要素を得る。しかし、その中で無意識的にせよ意識的にせよ婚外恋愛に落ちていく。それは「結婚前に予想していなかった」「だめなことだと思った」というコメントからも「落ちる」というのが妥当な表現なのかもしれない。しかし、彼らはまた《夫婦関係》に対しては〈不満のなさ〉を前面に押し出し〈妻への愛情表現行動〉をし

ていることを語る。その反面、同時に〈妻への慣れ〉や〈性的関係の減退〉などがあることも語る。

恋人との関係が始まると、《栄養剤》で表現された、以下のことからエネルギーを得ていく。まず〈性的要因〉というもっとも分かりやすく具体的な部分である。そして逆に〈ドキドキ〉といった関係性の中で感じる陽性感情や、さらに〈成長〉という自分がより成長できると感じることでできる部分も《栄養剤》となる。さらに加えて、〈いつもと違う役割と体験〉つまり『恋人との関係の中で普段の自分とは違う役割を経験したり、また日常とは違うことを体験したりすること』で《栄養剤》を得ていく。そして、心の余裕と関係が相対化されたことで、《夫婦関係の再考》がおこる。具体的には、婚外恋愛が妻に露呈するという機会に〈露呈による妻への思いの変化〉がおこり、また、露呈しない場合でも〈妻への認識や行動の変化〉がおこり徐々に妻の特別さを感じるようになる。

他方で、妻、恋人とも〈思い出と時間の共有〉や〈相手の弱さを知る〉ことで徐々に《絆》が作られていく。その結果、相手に対して〈俺がいなくちゃ〉という思いと〈相手のために離れないと〉という矛盾した思いが生じる。

それらの概念が影響し合い、初期から感じていた《心の葛藤と罪悪感》が〈婚外恋愛に対する罪悪感〉や〈婚外恋愛独自の己の葛藤〉を感じ、より複雑なものになることで苦しんでいく。

そして彼らは婚外恋愛によって不安定になった心のバランスをとるために《関係の再価値化》を行う。具体的に、〈結局は壊れない〉と妻の永続的な関係を確信し、だからこそ大切なその関係を守るために、恋人を好きになりすぎる気持ち〈心のブレーキ〉で抑えていく。しかし、自身の中での関係の整理ができて、現実は何もかわらない。そこで、さらに、現状をそのま

ま認める「自己意味づけ作業」を、〈肯定的物語探し〉〈好きだから〉を用いて行っていく。そのバランスを取り戻す試みをすることによって現状の関係が維持されていく。そして婚外恋愛の関係が続く限り、絶えず安定への試みは続けられ修正されていく。

以下Figure1に概念カテゴリーの影響の方向を表した。

3-2 カテゴリー：夫婦関係

〈妻への愛情表現行動〉

「日常生活の家事を協力する」「記念日はかならずサプライズをする」「毎日愛してると言う」などの語りが見られた。このように妻に対して愛情を示す行動をすることもinfo.の男性たちの特徴といえる。この概念を〈妻への愛情表現行動〉とし、『妻へ愛情や感謝を伝えること』と定義した。妻が夫にもっとも望むこととして、感謝の言葉が一番に挙げられる（NIKKEIプラス1, 2006）。一方、夫婦間満足度は、夫より

妻のほうが低い（菅原・託磨, 1997）。そこからも、多くの夫は感謝の言葉を妻にかけていないことを推し量ることができる。そう考えると、それが出来ているinfo.たちは、世間一般の妻から不満を持たれる男性と違う可能性が高い。もちろん、妻への後ろめたさからの行動である可能性もあるが、info.は婚外恋愛以前からその点は変わらないと語っていた。それも含め、夫婦の中で愛情行動が愛情行動として成立するには、妻側が愛情行動と認識する必要がある。そのため、この概念はinfo.側の主観的な意識であるという点は留意すべきである。

〈妻への慣れ〉

上記の概念のようにポジティブな夫婦の側面だけではない。もちろんinfo.の男性達も不満という言葉でこそ表現しないが、夫婦という関係の中で時間とともに失われていくものを感じている。それを〈妻への慣れ〉と概念名を付け、『日常の中で妻に対して慣れを感じるようになること』と定義した。

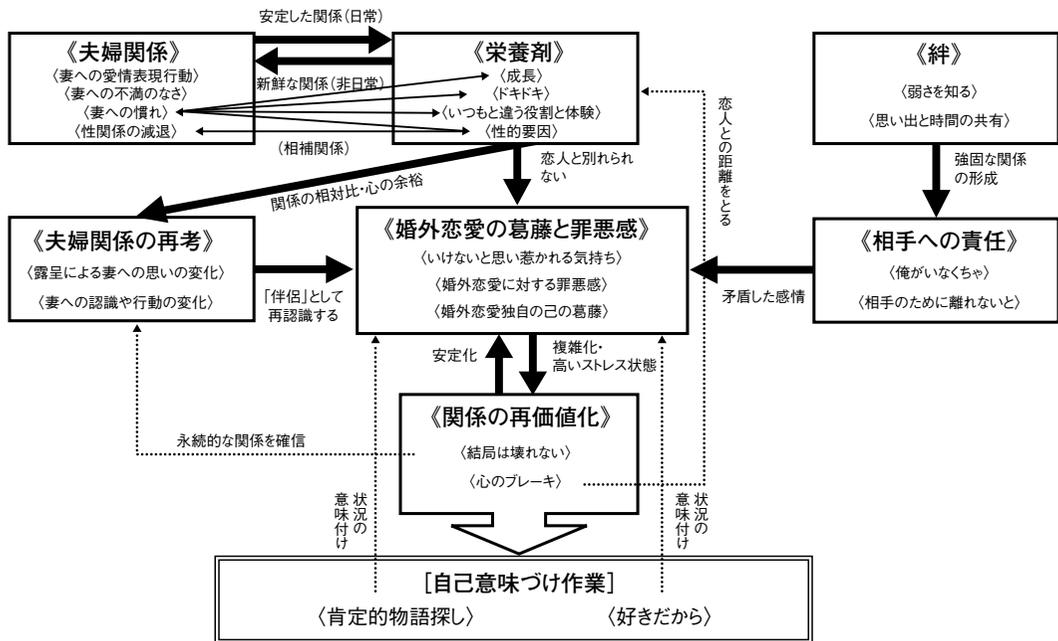


Figure 1. 既婚男性の婚外恋愛意味づけプロセス図

「生活の中で見ている人やから、普段部屋に下着も干してあるし、風呂から上がった後そのへんぴーと歩いているときもあるし。普段から見ているから、慣れてしまっていることもあるし。」

このinfo.は一緒に生活をする妻に対してときめきや性的な魅力が生活の中で徐々に消えていった。それは、妻との関係の中で得られる安定というものの代償といってもいいだろう。

〈性関係の減退〉

妻との長い婚姻生活の中で性関係が減っていったり、なくなったりしたという語りが聞かれた。また、そのきっかけとして子どもの誕生があると語った男性もいた。それを『婚姻生活の中で妻に対する性的興味が減退したり、性交渉の頻度が減少していくこと』と定義し、〈性関係の減退〉と概念名を付けた。

出産を契機に性的な興味が減退したinfo.は2人存在した。このことは、小野寺(2005)が明らかにした、子の誕生から2年間は夫婦の親密性が低下することと重なりがあるのかもしれない。また、そのことを夫婦の問題とすることで妻を傷つけてしまうのではと語るものもいた。

3-3 カテゴリー：栄養剤

例外なくすべてのinfo.は婚外恋愛を通してエネルギーを恋人との関係の中から得ていた。それを、《栄養剤》というカテゴリーにした。info.は《栄養剤》を得ることで日々の仕事の効率という現実的な側面から、夫婦関係への心の余裕、さらに生活の張りとなっているなど多岐に及んだ。では、いったいその《栄養剤》とは何なのであろうか。その点を念頭に置き分析を続けると〈性的要因〉〈いつもと違う役割と体験〉〈ドキドキ〉〈成長〉の4つの要因が明らかになった。

〈性的要因〉

『性的満足が得られること』と定義し〈性的

要因〉と概念を立ち上げた。info.は性的に相手から満たされていることを語る。しかし、この要因をあまり強調しない。その背景には語り難く、受け入れられ難いという社会的理由も考えられるであろう。そのためか純粋な〈性的要因〉というよりそれに付随して得られるものを以下のように強調する。

〈ドキドキ〉

性的なことではなく、『恋人との関係の中でドキドキ、ドキドキと表現される陽性感情を持つこと』と定義した〈ドキドキ〉の存在も同時に大きい。あるinfo.は婚外恋愛で得られているものとして一番大きいのはこういう感情であると語ってくれた。

〈いつもと違う役割と体験〉

男性は妻との関係を日常という言葉で表現して、恋人との関係を非日常と表現する。それは、家庭の中で父であり夫であることを日常という言葉で表し、日頃演じることのない役割を非日常という言葉で表現しているのだろう。それらの語りを『恋人との関係の中で普段の自分とは違う役割を経験したり、また日常とは違うことを体験したりすること』と定義し、〈いつもと違う役割と体験〉と命名した。

一つは彼女が運転する車にのったときは、幸せだと思った。今まで付き合ってきた人って車の免許持ってなかった人が多くて、女性で、要するにいつも運転する側だったんですよ。ところが彼女は運転をバリバリこなすっていったら変だけど、一緒に乗って、別の空間というか、新しい空間でいうのを感じましたね。

〈いつもと違う役割と体験〉の概念の中でも上記のinfo.の語りは多様な意味合いを持つ。まず、恋人が運転する車に乗ることは、彼の人生にはあまりなかった、男性としての社会的役割、つまりジェンダーからの解放の経験なのである。また、妻と一緒にのときは異なり、自らも

新しい役割が演じられる場としても捉えられている。この概念は固定化されている役割への反発であったり、不満を顕著に表しているというより、むしろ既存の役割以外を持つ喜びである。この概念は、自分の可能性を広げることと同義であり、次の〈成長〉との重なりも強い。

〈成長〉

恋愛を通して、自分が成長するということに言及する語りが多く見られ、それを『恋人と接することで人として成長すること』と定義をつけ、〈成長〉とした。info.は不倫するという他者との親密性獲得の中で自分の変化を感じていく。それは同性であっても可能なように思われるが、深い他者との親密な関係は男性の場合同性より異性の方が作りやすいと言える。というのは、Buhrmester (1996) やMaccoby (1990) が報告しているように、同性の友人関係では男性の場合は、力、行動そして支配が中心になるからである。つまり、同性は弱みを見せる対象ではなく、競い合い、高めあう存在なのだ。したがって男性は、自己の内面をさらけ出し、内面的成長を求めるとき必要とするのは、異性である女性になる可能性が高い。そして、内面を曝け出すほどの親密さはそのまま恋人関係につながる可能性が秘めている。

〈性的要因〉〈いつもと違う役割と体験〉〈ドキドキ〉〈成長〉は〈妻への不満のなさ〉〈妻への慣れ〉〈性的興味の減退〉とパラレルな関係になる。視点を変えると安定という妻との関係を得ていく中で失われたものを取り戻す作業といってもいい。つまり、〈性的興味の減退〉は〈性的要因〉に、そして〈妻への慣れ〉はすべての概念と相互作用がある。さらに、〈妻への不満のなさ〉とのカテゴリーの関係において、妻への妻役割意識というジェンダー意識の表出が見てとれるのではないだろうか。つまり、妻には、家事をし、母として子育てをするという社会的分業という役割を満たすことに期待を置いてい

るため、不満という形では出ず、恋人に求めるという形で表出していると思われる。人の欲望は永続的であり、恋人との新鮮さは時間とともに消失していき新しい人を求めると考えることは可能であるが、本研究のinfo. 6人中4人が恋人と4年以上関係を継続しており一概に上記のことを裏付けることはできない。つまりこのカテゴリーは新鮮さの追及という視点では捉えることのできないものである。Maslow (1970) の欲求階層説によると人の要求は下位の要求が満たされると次の要求にシフトしていく。それを当てはめると、妻との安定した関係の中で、帰る場所を確保して精神的安定を得たことにより、より高次の要求を求めたといえるのではないだろうか。それが〈成長〉であり〈いつもと違う役割と体験〉である。彼らにとって恋人との関係は安定を提供してくれる妻との関係の上に成り立つ。それはある種の相補関係といってもよい。妻との関係から得られるものがなければ恋人との関係から得られるものもなくなる。つまり、両者は相補に影響しあいながら維持されている。そのためその相補的な関係が成立した男性においては、さらに新しい人へという要求は発生しづらい。

3-4 カテゴリー：夫婦関係の再考

このカテゴリーは婚外恋愛を通して夫婦関係や妻への思い、行動が変化したことを示したカテゴリーである。婚外恋愛の中で、妻との二者関係が三者関係になることにより、妻の存在が相対化され認識が変化していく。また、《栄養剤》の影響も強く、そこから生まれた心の余裕が妻との関係を再考する契機を与える。

〈露呈による妻への思いの変化〉

info.の中には婚外恋愛が妻に露呈することによって妻に対する思いが変化した人たちがいた。彼らの語りを『婚外恋愛が露呈するという経験を通して妻への思いが変化すること』と定

義し、〈露呈による思いの変化〉という概念を立ち上げた。

婚外恋愛が露呈しても許してくれる妻を前にして、愛情が深まったと語ったinfo.は多かった。加えて、露呈をきっかけにタブーがなくなり、何でも話せるようになったという語りも多くみられた。これはLinguist(1989)が明らかにした、婚外恋愛が配偶者に知られることで配偶者との親密性が上がる機会になり得るという結果と一致する。もちろん、初期において、妻から責められ、不和場面に遭遇している。それを話し合いで解決することで妻への愛情が増加してきたとinfo.は認識している。しかし、他方で恋人との不和場面は語られない。また、不和場面に遭遇していないと語るinfo.もいた。壊れないという意識の上で不和場面を持ち込める妻との関係と、脆弱であるため不和場面を作ることを回避している恋人との関係という対比が推測される。

〈妻への認識や行動の変化〉

上記の概念とは違い、妻に対して婚外恋愛が露呈しなくても、時間の経過とともに妻への愛情行動が増加していったinfo.もいた。そこでこの概念を『婚外恋愛をとおして妻への認識や行動が変化していくこと』と定義した。

婚外恋愛で《栄養剤》を得ることで精神的余裕が生まれ、結果として家族に対して向き合えるようになる。また二者関係の閉塞感からの解放とも捉えることができる。info.の中には外で恋人を作ったことで、妻との関係を自分にとってはなくてはならないもの、生涯連れ添う人と徐々に変化していったと語った者もいる。

なお、このカテゴリーは比較対象群の語りからは見られず、このinfo.の男性達の大きな特徴とも言える。

3-5 カテゴリー：絆

一般的な恋愛と同じように相手との関係を離

れられないものにする要因がいくつか考えられる。それをここでは《絆》というカテゴリーの下に、2つの概念でまとめた。

〈弱さを知る〉

妻、恋人関わらず、相手の弱さを知ることによって相手へのコミットメントが上昇していく。それを『相手の弱さを知ることによって相手を大切に思ったり、離れられなくなること』と定義し〈弱さを知る〉という概念で示した。

過去のことをいっぱいいろいろ知ってるじゃないですか。それこそ子どもの頃のこととか。自分の場合、付き合った人は苦勞した人が多いんですよ。(中略) そういうの知ってるのでね。どっちも大切にしなければいけないなって気持ちです。

このinfo.は同時に妻と恋人の大変な過去を語り、それによって大切にしないといけないという思いが想起されたと語っている。この語りは程度の差こそあれ他のinfo.の語りにも見られ、そこに、存在する両方を大切にしなければならないという矛盾した感情が見受けられる。

〈思い出と時間の共有〉

お互い長い時間を共有することで相手への愛着が徐々にあがって離れる事が困難になっていく。それは妻との関係だけではなく恋人との関係も含まれる。それを『お互い共通の思い出や時間を共有すること』と定義し〈思い出と時間の共有〉とした。

〈弱さを知る〉、そして〈思い出と時間の共有〉によって築かれた《絆》が、両方を大切にするという相反する思いとなって次の《相手への責任》に繋がっていく。

3-6 カテゴリー：相手への責任

《絆》の影響で相手から離れることが困難になり、関係がより強固なものになることで男性の多くは相手へ責任感に近い感情を持つようになる。それは、〈俺がいなくちゃ〉と〈相手の

ために離れないと」と矛盾した思いである。

〈俺がいなくちゃ〉

〈今の奥さんだから大切だと思える理由は嫁はんの育ってきた環境が大変やっただから。(中略)俺じゃなきゃだめなのかなあと。〉

info.の多くは、婚外恋愛を通して恋人と、結婚生活を通して妻と自分がいないと相手はだめになるという一種の責任感を感じるようになる。それを『妻に対して自分がいないと相手はだめだと思ったり、相手にとっての自分の存在が大きいと感じること』と定義し、〈俺がいなくちゃ〉と概念を生成した。

他方で、あるinfo.は妻または恋人のどちらかを選ぶという決断に際し、「自分を必要としてくれるほうを選んだ」と答えた。つまり、〈俺がいなくちゃ〉と感じさせてくれる人を選んだのだ。それに近い語りが他のinfo.からも聞かれ、必要とされているという認識が、男性にとっていかに重要であるのが読み取れる。

〈相手のために離れないと〉

でも俺はやっぱり、戻るとこあるけど、彼女は戻るとこないじゃないですか。彼女がやっぱ一番寂しい思いをするし。

上記のinfo.のように、関係の深まりと同時に生まれてきた相手への責任の中で、別れを考えるようになる。〈俺がいなくちゃ〉とは逆に、この語りのように離れる相手として認識するのは恋人のほうが多い。それらの語りを『相手の将来を考え、自分と別れたほうが良いと思うこと』と定義し、〈相手のために離れないと〉という概念を作った。それらはおそらく《絆》の強さによって変化すると思われる。これは比較対象群である妻と別れて恋人と結婚した人の語りの中には、妻との《絆》はまったく語られていなかったことから裏付けられる。

3-7 カテゴリー：葛藤と罪悪感

婚外恋愛による《葛藤と罪悪感》は多岐にわたる。特に、初期に感じていた《葛藤と罪悪感》は今まで説明していたカテゴリー、概念の度合いが強まれば強まるほど影響が増え、より複雑なものになっていく。その複雑さはさらに高い《葛藤と罪悪感》を生む。

〈婚外恋愛に対する罪悪感〉

婚外恋愛関係になった後も、悪いことをしているという罪悪感が付きまとう。「奥さんにすまないという気持ちがある」ということが話の中で聞かれることが多く、また、「(罪悪感が)えげつない時期があった」と語ってくれたinfo.もいた。その他では、妻以外にも「子どもにとってよくない」という語りも見られ、自身の行動が子どもにとってマイナスになることを感じているinfo.もいる。それらの語りを『婚外恋愛によって感じる罪悪感』と定義をし、〈婚外恋愛に対する罪悪感〉という概念を作った。

この概念は《夫婦関係の再考》によって、さらにその申し訳なさの度合いを増していく。罪悪感には妻に対して、家族に対しての責任感から来るものであろう。下田ら（2004）による既婚者に対しての調査によると、婚外恋愛に対する後ろめたさに関して、女性の39.7%に対して、男性は実に53.1%の人が後ろめたさを感じたと回答している。そこから責任という言葉と男性性と結びつきの強さが窺える。

他方で、罪悪感の相手は家族や、妻だけに留まらない。自分と一緒にいることで、恋人の家庭や子どもに悪影響を及ぼしているのではという罪悪感を感じたり、またあるinfo.は恋人の母親に対する申し訳なさで良心の呵責に悩まされたりしたことを語った。また、罪悪感には人に対してだけではなく、社会的な規範に対するものもある。好きな人ができた時点で離婚しないとだめなのではという葛藤を抱え苦しんだ経験を語ったinfo.もいる。

多くのinfoがこの罪悪感の中、恋人との関係を絶とうという思いに至りながら、それを実行できない現実に苦しむ。苦しんだ分だけ、恋人の存在が自分の中で大きいことを実感しながらも、同時に妻の大切さという2つの相反する感情に引き裂かれていく。この2人の存在の大きさもまた《絆》によってより大きくなる。さらに、《相手への責任》が強まることでより複雑さを増していく。

〈婚外恋愛独自の己の葛藤〉

婚外恋愛は普通の恋愛とは違い「一番」が複数存在する異例の状態になる。それだけに当人たちの葛藤も大きく、今まで経験してきたものとは異なった経験をする。それらを『婚外恋愛独自の難しさからくる葛藤』と定義した、概念を抽出した。

infoは妻という婚姻上の正式な相手がいるということで、恋人と普通の恋愛のように過ごせず、また、恋人にもそれを求めることができない矛盾に葛藤する。

3-8 カテゴリー：関係の再価値化

社会的、倫理的、そして己の良心から生じる罪悪感、婚外恋愛であるため相手を過剰に求めることができないもどかしさ。さらに相手の家族の存在は、互いに影響を及ぼしながら複雑化していく激しい《葛藤と罪悪感》。それらを自分の中で整理できない結果、infoは高いストレス状況に陥る。その中でinfoは、妻との関係、そして恋人との関係を再度自身の気持ちの中で整理していく。

〈結局は壊れない〉

婚外恋愛という一見夫婦関係を壊しかねない要因にも関わらず、それが妻に露呈しても自分たちの夫婦関係は大丈夫であるということを語るinfoは複数いた。それらの語りに対して〈結局は壊れない〉と概念名を付け、『恋人がいることが妻との関係を壊す主要因にならないと思

うこと』と定義した。

恋人の存在が妻との関係を壊す主要因にはならないだろうとinfoは語った。これは《夫婦関係の再考》とパラレルな関係にある。つまり、過去に恋人がいることが露呈しても関係が壊れなかった安心感によるものが大きいと思われる。また、同時に婚外恋愛を通して大切にしてきた家族第一という思いが、後ろめたさを解消し、大切にしてきたのだから妻も同じように思ってくれているはずだという思いにシフトしているのではないだろうか。多くのinfoは家族第一ということを大切にしており、なおかつそれを恋愛相手にも伝えていた。その思いが妻はわかってくれるはずという期待へ姿を変えてもなんら不思議はないと思われる。また、この概念があるからこそ、恋人を大切にしながらも、妻を第一として考える現状を自分自身の中で説明できるのであろう。そして、この概念によって《葛藤と罪悪感》は徐々に和らいでいく。さらに、この永続的な関係の安心感は、結果として妻への距離を縮める。そうなることによって、以下の概念が立ち現れる。

〈心のブレーキ〉

『恋人を好きになりすぎて自分を見失ったり、家庭を壊さないために恋人を好きになりすぎないようにしたり、いつ別れてもいい心の準備をすること』という定義で〈心のブレーキ〉と名前をつけた。infoは共通して割り切るという言葉で相手への愛情の増加を押さえようとしていたり、恋人との関係を真剣であるといいながらも、気持ちをある一定以上上げないようにブレーキをかけていると語った。〈妻との関係についての安心〉を持ち、しかし、だからこそその信頼に応えないと、という思いも相まって高いストレスの中で〈心のブレーキ〉は踏まれていく。

3-9 コアカテゴリー：自己意味づけ作業

《関係の再価値化》によってinfo.は、夫婦関係、婚外恋愛関係の自身の中での価値を整理するが、変わらない現実、つまり恋人も妻もいる現状がある。その変わらない現実と《関係の再価値化》によって整理したこととのギャップは大きい。そしてそのギャップはさらなる《罪悪感と葛藤》を生じさせる。そこで、その現状そのものを意味づける作業が必要になってくる。その結果、info.は妻を優先にしつつ、恋人との関係も大切にしているという現状を、自分の中で意味づけていくことにより、自身の精神状態を安定させようと試みる。それを本研究では「自己意味づけ作業」というコアカテゴリーにした。それは今までに示した概念が一時的に収束する通過点である。info.は自身の心の安定を保つ試みを行う。しかし、試みはあくまで試みであり、到達点はない。つまりこの概念は到達点を示したのではなく、プロセスの集大成であり過程そのものを示したものである。この「自己意味づけ作業」には以下の概念が用いられる。

〈好きだから〉

婚外恋愛の認知的な不協和を解消するため、自身の中で言語化して意味づける行為が見られた。それを『行為や現状を自身の中で言葉によって説明することで納得しようとする』と定義して〈好きだから〉とした。「好きだから仕方がない」という語りは多くのinfo.に共通して見られた。妻以外に好きな人ができることは悪いことという倫理観と現実のズレを解消するために、再度男性たちは今の状態の意味を変化させようと試みていく。

〈肯定的物語探し〉

上記概念のように純粋な自身の中での意味づけとは異なり、外的な知識を参照しながら自身の心のバランスを取るために意味づけを行っていく。それを『現状や行為を肯定的に説明したり、納得したりするために外的な知識を探すこ

と』と定義し、〈肯定的物語探し〉という概念を生成した。

そうやって悩んでるときにこれを許してくれるものはないかとか思っているんなものを探したりしたり。ヒンズー教の神さま。絵がある。神さまが浮気してる絵やねん。(中略) そういう人にも許しを与えるみたいな。

上記の語りのように、神様が浮気していたり、統計的な調査を参照にしたりすることで、自身の罪悪感を低下させようと試みていく。やまだ(2000)によると物語は、自己と他者(あるいは、もう一人の自己)の亀裂や、前の出来事と後の出来事のあいだの裂け目が大きくなったとき、それをつなぎ、意味づけ、納得する心のしくみが必要なときに生まれる。つまり、人が日常を生活している時には物語は生成されにくい。日常を離れ、非日常を感じる葛藤状態の中で物語は生成される。そう捉えるならば、この男性たちの物語そのものが、彼らの心のうちに高い葛藤があること、そしてその状況を様々な葛藤と戦いながらも生き抜いてきたという事実の証明になると考えることができるのではないだろうか。

4 総合考察

本研究は妻との良好な関係を維持しながら、婚外恋愛をする男性が婚外恋愛関係を安定化させていく過程をどのように意味づけ継続していくか、そして婚外恋愛の社会的位置づけを明らかにすることを目的とした。

本研究では「婚外恋愛」という言葉を、中立性を保つために用いた。しかし、インタビュー中info.自身が「不倫」という言葉を使っていた。それだけ「不倫」という自己批判を含んだ言葉が彼らの中に生きており、リアリティを持っているのだろう。

「不倫」というマイナスの評価から婚外恋愛は世間では「楽しんでるだけ」というふうに言われる。しかし、本研究のinfo.は、高い《葛藤と罪悪感》に苛まれていた。その内実を記述したことは、それだけで従来のドミナントストーリーを書き換える契機を与えたと考えられる。また、「楽しんでる」を違う言葉で婚外恋愛の「快」の部分を書き換えた《栄養剤》というカテゴリーは、その中身を特定したという点で詳細に婚外恋愛の現象を把握する上で大きな意味を持つ。特に、《栄養剤》の中で語られた、妻との安定的関係とパラレルな関係を持つ〈性的要因〉や〈プラトニック要因〉、逆に成長欲求を満たしてくれる〈成長〉や〈いつもと違う役割と経験〉はなぜ男性は婚外恋愛関係を長期的に維持するのかという問いに十分応えてくれると思われる。

info.たちは、婚外恋愛の経験を通して妻との関係を再考していく。それは読み間違えると、妻に無償の愛を得られる存在である母の役割を重ねるといった、従来の物語に見えてくる。しかし本研究において見られた語りは、長期的に自らの力も相まって作り上げてきた夫婦関係への信頼であり、自らの努力を伴うため、従来の物語とは異なる。もちろん、ここに完全な無償の愛の物語からの脱却があるわけではない。info.の多くは何をしても許してくれる妻像が見え隠れする。しかしながら、その物語を多少なりとも書き換えることが本研究では達成できたのではないだろうか。

他方で、これは男性の語りであるという点と同時に、彼らの語りを支える女性の存在を考えなくてはならない。彼らは1人で恋愛をしているわけではない。info. 6人中、4人の恋人には夫がいる。つまり、従来の経済力が豊かな男性が妾を抱えるといった婚外恋愛とは異なる。彼らは経済的につながっているわけではない。その背景には、男性に一方的に選ばれるのではな

く、自ら主体的、選択的に男性を選んでいるという従来のジェンダーを打ち破った女性の存在が考えられる。また、男性側においても異なる。ジェンダー論では、男性は女性に対して「優越志向」「権力志向」「所有志向」があり、女性を支配の対象としてモノ視する態度があると指摘されてきた(たとえば、伊藤, 1995)。しかし、彼らの関係の中でそれは薄い。つまり、恋人を相手の夫から奪って自分のものにしようとする支配欲や、恋人にそれを押し付けたりするところはあまり見られない。彼らの関係は限りなく平等に近いように見える。逆に、規定されたジェンダーを持たない中性的な男性という概念からも外れる。彼らは《栄養剤》からも見て取れるように、恋人との関係の中で、自分が男性として見られているという男性としてのアイデンティティを再度確認していく。婚外恋愛とは、結婚によって喪失した男としての役割、男性アイデンティティの再構築の一面も持ち合わせているのだ。支配ではない、平等の関係の中から男性としてのアイデンティティを見出せる新しい男性性は、婚外恋愛という事象を超えて新しい男性性の可能性を示してくれるものとなるのかもしれない。

他方で、Linquist (1989) は、婚外恋愛を社会の基盤となる家庭を脅かす破壊行為として否定するのではなく、夫婦関係の足りない部分を補って結婚生活を守ったり、経験者に人間の成長をもたらすとした。本研究では、男性側の主観的な語りのみを扱ったため、断定的には言うことができないが、夫婦関係が壊れないように保つという、社会的視点で家族制度を守っている可能性が示唆されたのではないだろうか。

本研究の意義は、[自己意味づけ作業]というコアカテゴリーの元へ他の概念が影響を与えながら変化していくプロセスが明らかとなった点にある。Frank, A. W. (1995) は病になった人は、情報や海図を失う難破船のようなものだ

とした。婚外恋愛は病ではない。しかし、葛藤が多いという点では共通するところがある。このプロセスは、当事者や、それに関わっている人の海図となり、自身の立ち位置をそれに照らして、判断する材料になると思われる。

最後に、本研究は夫側の語りを分析した。したがって、妻側の視点が欠けている。量的には非対称であれ、同じ問題があることが想定される。また、妻側が夫の行動をどのように見ているのかも本研究にはまったく反映していないことも考慮の必要がある。今後の課題として、夫側だけではなく、妻側の婚外恋愛も明らかにしていく必要があるだろう。また、夫側に関しても、本研究で扱えなかった、婚外恋愛時の、子どもの存在など他のバリエーションが考えられる。それらの研究も今後必要である。

謝 辞

話しにくい事柄にもかかわらず快く調査にご協力頂きましたinfo.の方、そしてアドバイスをくださいました皆さまに心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Allen, E. S., Atkins, D. C., Baucom, D. H., Snyder, D. K., Gordon, K. C., & Glass, S. P. (2005) Intrapersonal, interpersonal, and contextual factors in engaging in and responding to extramarital involvement. *Clinical Psychology: Science and Practice*, 12, 101-130.
- Buhrmester, D. (1996) Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Bukowski, A. F. Dewcomb, W. W. Hartup. (Eds.) *The Company They Keep: Friendship in Childhood and Adolescence*. Cambridge University Press.
- Dym, B., & Glen, M. L. (1993) *Couples: Exploring and Understanding the Cycle of Intimate Relationship*. New York : Harper Collins.
- Frank, A. W. (1995) *The Wounded Storyteller: Body, Illness and Ethics*. University of Chicago Press. 鈴木智之 (訳) (2002) 「傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理」. ゆみる出版.
- Glass, S. p., & Wright, T. L. (1992) Justifications for extramarital relationships in the continuation of marriages. The association between attitudes, behaviors, and gender. *Journal of Sex & Marital Therapy*, 5, 271-284.
- 伊藤公雄 (1995) 男性の性もまたひとつではない. 天野正子 (編) 「男性学」. 岩波書店.
- 木下康仁 (2003) 「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究の誘い」. 弘文堂.
- Linguist, L. (1989) *Secret Lovers: Affairs Happen How to Cope*. Lanham : Lexington Books.
- McAnulty, R. D., & Burnette, M. M. (2004) *Exploring Human Sexuality: Making Healthy Decisions* (2nd Ed.). Boston: Allyn and Bacon.
- Maccoby, E. (1990) Gender and relationships: A developmental account. *American Psychologist*, 45, 513-520.
- Maslow, A. H. (1970) *Motivation and Personality*. Harper and Row.
- 松本健輔 (2008) 婚外恋愛における主観的意味付けの分析. 立命館大学大学院応用人間科学研究科修士学位論文.
- 日本経済新聞社 (2006) なんでもランキング 夫・妻に望む振る舞い. NIKKEIプラス1.
- 野原広子 (1999) 浮気の実験はありますか? (特集 男は、なぜ浮気するのか). 婦人公論, 84(8), 34-42.
- 小野寺敦子 (2005) 親になることにともなう夫婦関係の変化. 発達心理学研究, 16(1), 15-25.
- 最高裁判所事務総局 (2008) 司法統計年報 平成19年度. 法曹会.
- 下田陽・梅崎正直・菊池嘉晃 (2004) 妻たちの「婚外恋愛」時代. *Yomiuri Weekly*, 63(39), 10-19.
- 菅原ますみ・託摩紀子 (1997) 夫婦間親密性の評価: 自記入式夫婦関係尺度について. 季刊精神診断学, 8, 155-166.
- Winek, J & Craven, P. (2003) Healing Rituals for Couples Recovering from Adultery. *Contemporary Family Therapy*, 25 (3), 249-266.
- やまだようこ (2000) 「人生を物語る—生成のライフ・ストーリー—」. ミネルバ書房.

(2010. 2. 24 受稿) (2010. 5. 19 受理)